

外れスキル持ちの  
天才鍊金術師

hazure skill mochi no  
tensai renkinjutsushi

神獣に気に入られたのでレア素材探しの旅に出かけます

2

著 蒼井美紗 Misa Aoi

ill. 丈ゆきみ Yukimi Take

# CHARACTERS

ジル

シュトイヤー王国の王都で  
パン屋を営む青年。



スーちゃん

鑑定と空中歩行の  
能力を持つ神獣。強気で  
高飛車。好物は魚。



アルフ

デルダード王国  
首都の漁師。  
現在は行方不明に。

デュラ爺

異空間魔法が使える神獣。  
物知りでみんなの  
お爺ちゃん的存在。



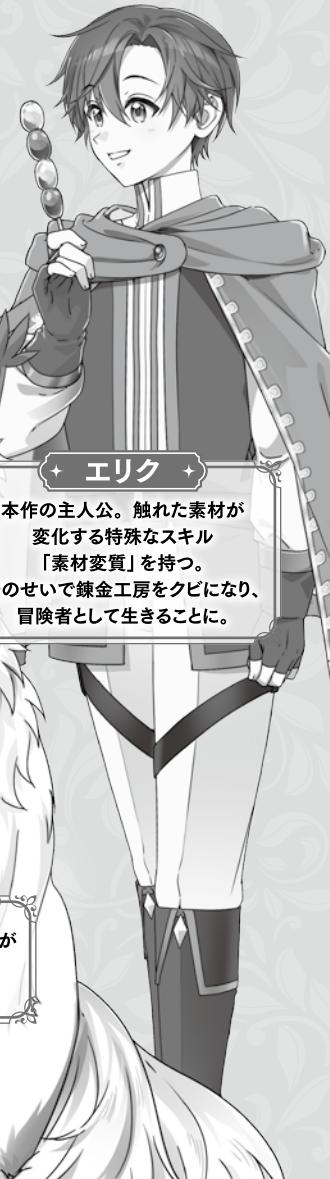
フィーネ

神獣を呼び出せるスキル  
「神獣召喚」を持つ。  
エリクをパーティーに誘う。



ラト

木の実が大好物な  
食いしん坊の神獣。  
いつも元気でおしゃべり。



エリク

本作の主人公。触れた素材が  
変化する特殊なスキル  
「素材変質」を持つ。  
そのせいで鍊金工房をクビになり、  
冒險者として生きることに。

リルン

鋭い爪の攻撃と風魔法が  
得意なフェンリル。  
実はツンデレ。



## プロローグ

二十歳までに一人一つのスキルが与えられるこの世界で、俺は“素材変質”というスキルを手にした。一度も聞いたことのない希少スキルに最初こそ浮かれたが、すぐに使えないスキルだと気が付く。

素材変質は當時、俺の両手のひらで発動している上に、触れたものを全て品質の悪いものに変質させてしまうのだ。使えないどころか害悪なスキルに、俺の人生は狂わされた。

働いていた鍊金工房では次々と素材をダメにしてしまい、クビになつたのだ。今まで築いてきた良好な人間関係も失われ、途方に暮れた。

そこで俺は最後の手段として、冒険者を選んだ。冒険者とは命の危険がある辛い仕事だが、誰でも登録が可能なのだ。孤兎で厄介なスキル持ちの俺を雇ってくれるところなどなく、俺にとつては唯一のお金を稼ぐ手段だった。

しかし戦闘技術など皆無の俺に明るい未来は見えず、不安を覚えながらの初仕事だったが……素材採取という地味な仕事を受注したことが、俺の人生の転機となつた。害悪だと思っていた俺のスキルが、実は有用なものだと分かつたのだ。採取済みの素材に触れる

と劣化させてしまつことに変わりはないが、採取前の植物に触れると、どんな植物もより希少で品質のいい素材へと変質した。さらに魔物も解体前ならば、俺が触るとより希少な魔物へと変質する。

このスキルの有用な面のおかげで、フィーネという神獣召喚スキルを持つ少女とパーティーを組むことになり、俺はフィーネと強くて魅力的な神獣たちとともに旅をすることになった。のんびりと気ままな旅をする予定だったが、物知りな神獣デュラ爺によつてスキル封じの石に関する詳細情報を得ることができ、旅に明確な目的ができる。

その石があれば、素材変質スキルの悪い面を完全に封じ込められるのだ。日常生活で様々な不便を強いられている俺は自分で石を鍊金することを決意し、まずは鍊金に必要な希少な素材を集めることになった。

フィーネと神獣たちも協力してくれるのであれば、必ずスキル封じの石を鍊金できるだろう。その素材の一つである星屑石(ほくすせき)を目当てに期待を胸にまず向かうのは、不毛な大地と呼ばれる場所だ。

## 第一章 デュラ爺の能力

デュラ爺が仲間に加わつた日の翌朝。

俺たちはさつそくデュラ爺の能力を詳しく教えてもらおうと、鞄を抱えて従魔用の小屋に向かつた。鞄はデュラ爺の能力である異空間干渉を実際に見せてもらうために用意したものだ。

大きな鞄を異空間に収納してもらえた、これから道中がどんなに楽か……：

考えるだけで、俺とフィーネの足取りは軽くなる。

「デュラ爺、リルン、朝ご飯は食べ終わつた?」

今この宿に他のティマーはいないため、従魔用の小屋は俺たち専用だ。

フィーネが小屋の中を覗き込みながら声をかけると、すぐに二人が姿を現した。リルンはまだ少し眠そうに見える。

『ふわあああ、とつぐに食べ終わつてゐるぞ』

『とても美味かつた。特にわしはパンに挟まれた肉が好きじゃつたな』

今日の朝ご飯として二人に買ったのは、バード系魔物の肉が挟まれたサンドパンだ。

『デュラ爺は肉が好きなのか?』

『わしはなんでも食べるんじゃが、肉は特に好む。今日のやつは肉に付いていた味付けも好みじゃったな』

「今日は香辛料漬けを選んだの。デュラ爺は少しスペイシーな味付けが好きなのかもね」  
フィーネがそう言つてこれから食事を考え始めたところに、デュラ爺が嬉しそうな表情で告げる。

『そうかもしけんが、わしはなんでも食べるぞ。久しぶりの人間社会、色々と試してみたい』

その言葉にフィーネは嬉しそうに口元を綻ばせた。

「本当？ ジャあ色々と美味しそうなものを選ばなくつちやね。パンじやなくて他の穀物も食べる？」  
例えは米とか豆とか。あと野菜や果物は？』

『もちろん、どれも食べる。そういうえば昔に食べたことがある、米を煮込んだ料理が美味かつた記憶があるな』

「米を煮込む……リゾットかな？ 今度買ってみるね。……でもリゾットつてお皿に入つてたら食べづらいか。食べられる薄い生地で巻けばいいのかな』

『いや、浅めの皿に入れてももらえれば問題はない』

『了解。じゃあお皿も買いに行かないとね』

リルンとラトはパンと木の実ばかりで、食事に關しては選び甲斐がないからか、フィーネは張り切つてている。

するとそんなやり取りを横で聞いていたリルンが、少しだけ躊躇いながら口を開いた。  
『フィーネ、デュラ爺が食べるのならば、たまには我也パン以外で構わない』

『え、いいの？ 今まで他の料理にはあんまり興味を示さなかつたのに』

『……デュラ爺に付き合つてやるのだ』

多分リルンは、デュラ爺が食べるものに興味があるんだろう。ただ素直には言えないらしく、ツンツンと顎を上げて顔を逸らしている。

そんなリルンが可愛くて想えていたと、リルンにキッと鋭い視線を向けられてしまつた。  
『エリクは何を笑つているのだ？』

『ご、ごめんごめん』

俺が慌てて誤魔化していると、今度はデュラ爺が楽しそうに口を開く。

『別に無理に付き合つてくれなくとも良いのじやぞ？ お主はパンが好きなのじやろう？』

『……むつ、そ、それはそうだが、フィーネも我らに別のものを用意するのは大変であろう？』  
『うーん、別にそこはそんなに大変じゃないよ？』

フィーネはデュラ爺の味方をして、リルンを少しかうことに決めたらしい。イタズラっぽい笑みを浮かべたフィーネも、デュラ爺と同じく楽しそうだ。

『なつ……そ、そつか、それならば、まあ、今まで通りでも……』

リルンが寂しそうな表情で俯きかけたところで、フィーネがリルンの首元に抱きついた。

「ふふつ、ごめんね。もう、素直にデュラ爺と同じものを食べたいって言えばいいのに」

自分の内心が皆に知られていると認識したところで、リルンは慌てた様子で声を張る。

『なつ、別にそんなことは思っていない！』

そう言つてふいつとそっぽを向いてしまつたリルンのところに、フィーネの肩からラトが跳ぶ。

そして純真な眼差しで告げた。

『リルン、食べたいならそう言わなきゃダメだよ？』

完全に善意からのラトの言葉には、リルンも強く反対できないようだ。

『うつ……そ、そうだな。そういうラトは、いつも通り木の実で良いのか？』

『うん！ 僕は木の実がいいな。でもね、僕もお皿が欲しい！』

その言葉で、話が少し戻つた。

「じゃあ、ラト用のお皿も買おうね。今日の午後にでも買い物かな。でもその前に、デュラ爺の能力を見せてもらつてもいい？ お皿も持ち運ぶには、デュラ爺の力がないと凄く大変で」

今まででは荷物を最低限にしなければいけないからこそ、お皿などもほとんど持つていなかつた。

『うむ、もちろんじや。まずは異空間干渉からで良いか？』

『それ以外の能力もあるのか？』

デュラ爺の能力については、まだほとんど聞いていないのだ。

他にもあるような言い方に、俺はすぐに問い合わせた。

『植物を操ることができるのじや。攻撃にも防御にも、森の中で野営をする時などにも使える』

『凄いな、さすが神獣だ。』

『そつちの能力もかなり気になるけど、まずは異空間干渉からでいい？』

フィーネの言葉に、デュラ爺は鷹揚に頷いた。

『もちろん構わない。では異空間干渉じやが、その鞄を収納すれば良いのか？』

『うん。この大きさのものは収納できるの？』

『鞄は両腕で抱えるほどの大きさだ。』

『なんの問題もないな。ではさつそく——』

デュラ爺がそう言つた瞬間、鞄が跡形もなく消え去つた。瞬きほどの時間で姿を消した鞄に、信じられなくて思わず自分の目を疑つてしまつ。

『鞄は異空間に入った、のか？』

何度も目を擦つても鞄が存在していないことを確認してからデュラ爺に恐る恐る問いかけると、デュラ爺は当たり前だというように頷いてみせた。

『うむ。この世界と似たような物質で構成されている空間を選んだから、心配はいらない。しっかりと別の空間に存在しておる』

まさかこんなに一瞬で目の前から消えるなんて、本当に驚いた。もつといろんな制限があつたり



するのかと……

「本当に凄いな……というか、空間ついくつもあるのか？」

「私もそれが気になつた」

空間を選んだという言い回しが引っかかり問いかけると、デュラ爺からはさらに衝撃を受ける話を聞けた。

『わしが干渉できる空間は全部で十ほどじやな。ただ使えない空間もあるので、実質使用しているのは三つほどじやが』

「十もあるのか……」

それぞれがどういう空間なのか、凄く興味を引かれる。

『その使つてる三つはどういう空間なんだ？』

『その三つは、全てこの世界と構成物質が似通つてゐるんじや。三つの空間の違いは気温じやな。常に氷点を大きく下回つてゐる空間と、十度ほどの気温を維持してゐる空間、それから五十度ほどの暑さが続いてゐる空間じや』

『今回の鞄を収納したのはどこなの？』

『二つ目じやな。一つ目は何かを凍らせて長期保存したい時、三つ目は高温状態での保存が適して

いるものを収納する時にしか使わん』

確かに氷点を大幅に下回ると五十度の気温はかなり厳しい環境だ。

でも特に氷点下の方は、かなり使えるな。水をそこに収納してもらって取り出せば氷になつてゐるだろうし、何よりも食料を凍らせて長期保存できるようになる。

「さつきの鞄をすぐに取り出すことはできる?」

『もちろんじや』

「本当に凄いね……」

フィーネは半ば呆れたようにそう呟くと、もう一度口を開いた。

「どうなつてゐるか確認してみたいから、一度取り出してもらつてもいいかな」

『うむ』

デュラ爺が頷いた瞬間に、さつきとぼぼ同じ場所に鞄が姿を現した。

「うわっ」

「慣れるまでは驚くね」

フィーネは鞄を持ち上げて、変わつた様子がないかを確かめていく。俺も一緒に確認したが、なんの変化もしていなかつた。

「これつて、どれくらいの量を一度に収納できるんだ……?」

『特に制限はないな』

デュラ爺は軽く答えたが、これは凄いことだ。

この能力があれば、荷物をいくらでも持ち運べる。

「デュラ爺、本当に凄いな!」

俺はなんだかテンションが上がつてきて、デュラ爺の背中を軽く叩きながらそう告げた。すると

フィーネも笑顔で同意してくれる。

『本当に凄すぎるよ。この力、私たちのために使つてくれる?』

『デュラ爺、ありがとう……!』

フィーネも相当嬉しいようで、デュラ爺にギュッと抱きついた。

『やつぱりデュラ爺は凄いよね!』

『パンをたくさん持ち運べるのはありがたいな』

そうして皆で一通り驚いて喜んだところで、また異空間干渉という能力の話に戻る。

『長時間中に入れてると収納した荷物が変化するとか、そういうことはないのか?』

『先ほど話した三つの空間ならば、収納した物質に特異な変化があることはないだろ?』

『……それ以外の七つの空間だと、どうなるんだ?』

好奇心に抗えず質問すると、デュラ爺の口から発された言葉は少し怖いものだつた。

『例えばその鞄を収納した瞬間、膨張して爆発するだろ? 空間があるな。それから膨張の逆で、小さく圧縮されて使い物にならなくなる空間もある。また物質がその形状を保てずに溶けたり、全く別の性質に変化してしまつたり、細かい粒子となつて塵<sup>ちり</sup>と化したり……まあそんな感じじやな』

……どの空間も怖すぎる。

その空間でなぜそななるのか全く理解はできないが、とりあえず他の空間には触れるべきじやないということは分かつた。

「デュラ爺、生きてるものはどうなの？ 例えば私たちを異空間に入れることはできる？」

俺が恐怖から無意識に腕を摩<sup>ます</sup>つていると、フィーネがさらに怖い質問をする。

もしそれができるつて返答だつた場合、荷物が原形を留められないのなら、俺たちだつて留められるわけないよな……

緊張から喉を詰まらせて返答を待つていると、

『無条件にとはいかない』

返つてきたのは、微妙な答えだつた。

とりあえず、『できる』と断<sup>ちぎ</sup>言されなかつたところは良かつたな。

『まず大前提として、わしは生きているものを異空間干渉で別の空間に飛ばしたことはほとんどない。したがつて少數の経験からしか説明できないんじやが、意思あるものはわしの能力に抗えるようなのだ。……というよりも、別の空間に向かうことに明確な同意がない限り、異空間干渉は失敗する』

それなら、あまり心配はいらぬかもしれないな。

デュラ爺が俺たちのことを、故意に危険な空間へ移動させるとは思つてないけど、何かしらの事

故で移動してしまう可能性が怖かつた。

それが起きないなら、一安心だ。

『その意思あるものつてどの程度か分かる？ 例えば小さな虫とか』

フィーネの疑問に、デュラ爺は首を横に振つた。

『移動させられないじやろう。わしが無条件に異空間干渉の能力を発動できるのは、無生物に対しうてのみじや』

「そつか。じやあ……採取した植物や魔物の素材とか、もう命が刈り取られてしまつたものはどう

なのかな。その直後でも収納できる？」

『うむ、それは問題なくできるじやろうな。それから植物に関しては、鉢植えの状態などでも収納できることがある』

色々と説明してもらつて、デュラ爺の持つ異空間干渉という能力が分かつてきた。

つまりあまり危険はなく、たくさんのものを適した環境で保存しておけるし、好きな場所で取り出せる最高の能力つてことだらう。

「色々と教えてくれてありがとう」

フィーネが笑顔でそう伝え、話に区切りがつく。

そこで俺は、ずっと気になつていたもう一つの能力について問い合わせた。

「それで、植物を操れるつていうのはどういう力なんだ？」

問いかけに周囲へと視線を向けたデュラ爺は、街の外に視線を向けながら口を開く。

『ここよりも森の方が力を使いやすいのじゃが、移動するか？』

『それなら……移動する？ まだ時間も早いし』

『そうだね。外に行こうか』

そうして俺たちは外に行くことを決め、街の外に出て森に入った。

人があまりいない場所を目指しながら歩いていると、フィーネが口を開く。

『植物を操る能力って、成長促進とかもできたりするの？』

『いや、それは無理じゃな。あくまでも現在そこにある植物を自在に動かせるというだけじゃな』

『ううなんだね。じゃあ、植物の性質を変えたり落ち葉を操つたりは？』

『ううじやな……例えば葉を鉄のように硬くするなどということはできないが、あくまでも植物というものの範囲内で鋭くしたり、硬さを持たせたりすることは可能じゃ。それから落ち葉なども、

木から落ちて長い時間が経つていなければ操れる』

無条件になんでもできるってわけじゃないが、かなり応用は利く能力って感じなのかもしねないな。

植物なんてどこにでもあるものを自在に操れたら、それは便利だろう。

『この辺でいいんじゃない？』

ラトが楽しそうに告げたことで、俺たちの足が止まつた。

『確かにそうだな』

『この辺まで来れば誰もいないね』

全員の視線がデュラ爺に集まつたところで、デュラ爺は少しだけ得意げに皆の前へと出る。

『では、軽く動かしてみよう』

そしてそう言った直後、俺たちの目の前にある植物が明らかに自然ではない動きを見せた。木に絡まつていた葛が意思を持つたように動いて葛同士が絡まり合い、森の中に椅子のようなものを作っていく。

さらに近くにあつた大木の枝が、葉擦れの音を響かせながら椅子の上まで移動した。日除けの役割を果たしてくれるようだ。

『こんな感じじやな』

『凄いな……』

植物が意思を持つように動いている光景は、なんだか不思議で幻想的で、思わず目を奪われた。

『これは、野営の時に凄くありがたいね』

『ううじやな。自然の中で過ごす時には力になれるじゃろう。木の上に野営場所を作ることも可能じゃぞ』

デュラ爺が上に視線を向けると、今度はさつきまで椅子の形をしていた葛がしゅるしゅるつと

登つていき、木の上にハンモックを作り出した。

さらに木の枝が複雑に組み合わさり、床のような部分もできていく。

『うわああ、凄いね！ あの上に行つてみたい！』

秘密基地のような場所ができると、ラトは大興奮だ。

『もちろん良いぞ。ラトならばそのまま登れるか？』

『うん！』

ラトはフィーネの肩から地面に飛び降りると、木の幹をタタッと軽快に登つていった。

そしてハンモックの上で嬉しそうに飛び跳ねながら、こちらを見下ろしてくる。

『皆、楽しいよ！』

「ラト、はしゃぎすぎて落ちないようにね」

フィーネが楽しそうなラトに苦笑を浮かべて注意していると、リルンが俺たちの前に出た。

『我も上に行こう』

自分も登れるところを見せたかったのか、ラトが楽しそうで羨ましかったのか、リルンが尻尾をゆらゆらと振りながら軽快に上へと登る。

そんなリルンに俺とフィーネは顔を見合させ、同時に笑った。

「ははっ、リルンってやつぱり可愛いよな」

「うん、とっても」

二人で楽しく笑い合つてから、隣で待つてくれていたデュラ爺に視線を戻す。

「デュラ爺、私たちが登る時はどうすればいいのかな。階段を作つたりできる？」

『それもできるが、一気に登る方法があるぞ』

デュラ爺は楽しそうにそう告げると、近くの木の枝をぐいっとしならせた。太い枝は俺たちの前に来るとピタッと止まり、まるで迎えに来てくれたようだ。

「もしかして、これに乗るのか？」

『うむ、その通りじや』

躊躇いつつの問い合わせにすぐ頷かれ、俺は少し戸惑つた。

しかし恐怖心よりも好奇心の方が勝り、目の前の枝に手を伸ばす。

「俺が先に乗つてもいいか？」

『うん、いいよ』

フィーネが了承してくれたので、俺はそつと枝に腰を下ろした。また跨ぐことも考えたが、椅子に座るような形だ。

『落ちないよう近くの細い枝を掴んでいると良い』

「分かった」

頷いてからしっかりと枝を握ったその瞬間、椅子にしている太い枝がぐいっと動いて、目線が一気に高くなつた。

「おわっ……凄いな」

動き出した瞬間は体が強張ったが、予想以上に安定している枝の上はそこまで怖さを感じない。ぐんぐん上がっていく景色を楽しんではいるが、すぐにラトとリルンのところに到着した。

『エリク！ こつちこつち！』

枝から木の上に作られたスペースに降りてみると、こちらもかなり頑丈で危なげない作りだ。枝や葉、葛などが上手く組み合わさり平らになつていて、歩きづらさも感じなかつた。

「ラト、落ちるなよ」

『大丈夫だよ。僕は木の上でよく生活してたから。それよりもこのハンモック、凄く楽しいよ！』

『俺が乗つても壊れないか？』

『多分大丈夫じゃない？』

ラトの曖昧な返事を信じることはできず、まずは強度を確かめるために手で押してみた。すると俺の力ではびくともしないほど頑丈に作られているのが分かつた。

これなら寝ても大丈夫かな……そう思い全体重を預けてみると、全身を心地よく包んでくれたハンモックは、ゆらゆらとわずかに揺れただけでかなり安定した。

「おおつ……」

これは最高だ。こんなに快適な野営なら、いくらでもできるかもしれない。

そんなことを考えていたら、フィーネとデュラ爺も登ってきて、全員が上に集まつた。

「やつぱり高いところは気持ちいいね！ この場所なら、魔物に襲われる心配はほとんどないかな」

『この高さならほんどの魔物は手を出さないだろう。今も魔物の気配はするが、こちらに来る様子はないぞ』

リルンの答えに、デュラ爺も同意する。

『そうじやな。ここならば安全じや』

『じゃあさじやあさ、もつと快適にしよ！』

テンション高めなラトがそう言って、何もないただの床になつていてる場所を指差した。

『その辺にテーブルを作るのはどう？ お昼ご飯を食べられるよ！』

『お、それいいな』

『でしょ？』

「あとは落下防止の柵もあつたら嬉しいかもしれない」

ラトに続いて俺も欲しいものを口にすると、デュラ爺は少しだけ考え込んでから周囲にある植物を確認し、また能力を使った。

植物の動きが止まつたところで、フィーネが声を弾ませる。

『一気に家っぽくなつたね』

『デュラ爺凄い!!』

それからもなんだかんだ全員が乗り気で、木の上の秘密基地を魔改造した。

最終的には快適だけどごちやごちやとした空間になつたところで、リルンが下に視線を向ける。

『アースボアが近くまで来たみたいだな。ただ上までは登れないはずだ』

俺も下を覗いてみると、確かに近くの茂みから、のそりとアースボアが顔を見せていた。

そこでふと思いつ出して、デュラ爺に問いかける。

『植物を操つて攻撃にも防御にも使えるって言つてたよな?』

『うむ、もちろん使えるぞ。ちょうど良いから、この場所からあのアースボアを倒そう』

『おおつ、ここから倒せるのか。』

かなり距離があるけど……そう思つていると、デュラ爺も下を覗き込むようにした。そしてその瞬間、アースボアの下に生えていた草が高速で動き、四肢に巻き付く。

動けなくなつたところに、近くに落ちていた落ち葉が矢のように飛んでいき、アースボアの胴体に無数に突き刺さつた。

あまりの早技と強さに、俺は二の句を継げない。これつて、森の中じゃほぼ無敵じゃないのか?

そんなことを考えていると、デュラ爺がポツリと呟いた。

『む、まだ生きておるな』

その言葉とほぼ同時に、近くの大木の枝が大きく振りかぶるような動きを見せ、アースボアの

横つ腹を思いつきり打つ。

その攻撃で吹き飛んだアースボアは……地面に倒れ込んで、そのまま絶命した。

『こんなものじやな』

『デュラ爺、本当に凄いね……これからは魔物との戦いも頼んでいい?』

『もちろんじや』

『ありがとう。今までリルンの負担が大きかつたから、もう少し分散できればって思つてたの。』

『デュラ爺が来てくれて良かつたよ』

フィーネのその言葉に、デュラ爺とともにリルンも嬉しそうな様子を見せる。

顔はツンツンと澄まし顔だが、尻尾はぶんぶんと振られていた。

『わしに任せておけ』

それからは張り切つたデュラ爺が魔物討伐に邁進し、デュラ爺に対抗しようとリルンが闘志を燃やしたことで、俺たちは魔物の解体に追われて時間が過ぎていつた。

ただデュラ爺の異空間干渉のおかげで、今まで捨てていた素材も保管しておくことができるようになつたので、解体のやる気が全然違う。

たくさんの素材を溜めておけば、これから先の鍊金で役に立つだろう。

『リルン、デュラ爺、そろそろ終わりにするよ!』

まだまだ元気そうな二人にフィーネが声をかけた。もうお昼を過ぎた時間なのだ。

『もう終わりなのか？』

『楽しかったのじやが……』

『解体をするのも大変だし、午後は食器屋に行くんでしょ？』

その言葉で午後の予定を思い出したのか、二人は素直に頷く。

『そうじやつたな。忘れるところだったわい』

『確かにそろそろ腹が減った。パンを食べたいぞ』

『そうでしょ？ だから街に戻ろう』

『うむ、了解した』

二人が納得してくれて、腹ペコなラトはもちろん大賛成で、俺たちは街に戻った。

行きつけのカフェでお腹を満たしたら、さつそく食器屋だ。

フィーネが選んだのは、ずっと気になっていたらしい路地にひつそりと佇むおしゃれな店だつた。たたず

中に入ると店員の女性がにこやかな笑みで迎えてくれて、おしゃれな食器に目を奪われる。

デュラ爺とリルンは体が大きいので店の外で待機だ。

『凄く可愛い……！』

フィーネは店内に並ぶ食器に目を輝かせると、近くにあつた器を手に取つた。

『木の実がたくさん描かれてるね！ 可愛い！』

『ラトにピッタリだよね？』

『確かにいいな。ラトの木の実を入れるのに使えそうだ。これつてこのデザインで別の形はないのですか？』

もう少し小さくてもいいんじやないかと思い聞いてみると、女性は申し訳なさそうに口を開く。  
『このお店に並ぶ食器は全て一点ものとなつておりますので、同じデザインで別の形のものは基本的にご用意できないんです。申し訳ございません。しかし木の実のデザインでしたら、こちらにもいくつかございますので、ぜひご覧ください』

『一点ものなのか。それは選ぶのが楽しそうだ。』

『そうなのですね。ありがとうございます』

女性が案内してくれたところにフィーネとラトと向かってみると、そこにはちようどいいサイズの木の実が描かれた器があつた。

『僕、一番右のやつが欲しい！』

ラトが目を輝かせて示した器は、俺がいいなと思つたやつだ。

『この右のやつ、ラトに買おうか』

『そうだね。この器を一つください』

「かしこまりました。まだお買い物を続けられますか?」

「はい。まだ色々と見たいです」

「では、こちらは取り置いておきますね」

「それから俺たちはリルンとデュラ爺用の大きめの皿も買って、さらに俺たち用の食器とカトラリーも買い揃えた。」

「そして最後にあまり使う機会はないかもしれないが、フィーネが一目惚れしたティーセットも購入し、大満足で買い物は終了だ。」

「楽しかったね」

「かなりな。やっぱり荷物の持ち運びを気にしなくていいって凄い」

「本当にそう。デュラ爺には大感謝だよ」

「そう言つてフィーネがデュラ爺を振り返ると、デュラ爺はまんざらでもなさそうな表情を浮かべている。」

「二人の皿はかっこいいやつにしたからな」

「ちよつとしたお揃いだよ?」

「お揃いという単語に、リルンは嫌そうに顔を顰めた。<sup>しづか</sup>」

『なぜ我がデュラ爺とお揃いなのだ』

「いいじやん。凄く可愛かつたんだよ? あと私とエリクのカトラリーも色違いのお揃いなの」

「カトラリーはちようどい大きさのやつがそれしかなかつたから、たまたま色違いになつただけだ。今までお揃いということを全く意識していなかつた俺は、フィーネから突きつけられた事実に動搖してしまう。」

「お、お揃い……確かに」

「ぶつぶつと呟いていると、フィーネが楽しそうな笑みを浮かべた。」

「せつかくのお揃いなんだから、大切に使おうね?」

「そう言つて顔を覗き込まれてしまふと、どうしても頬が熱くなつてしまい、俺は慌ててフィーネから一步距離を取る。」

「フィ、フィーネ、からかつてるだろ」

「ふふつ、バレた?」

「フィーネつてそういうところあるよな……」

「俺がふうと息を吐き出しながらそう呟くと、フィーネが楽しそうに笑つた。」

『ねえねえ、あそこのお店、木の実パンを売つてない!?』

『む、本當か? よし行こう。売り切れる前に買わなければ』

「俺たちの会話を遮るように、ラトが目敏く木の実料理を見つけ、すぐにリルンが反応する。」

「二人がさつそく目当ての店に向かう様子を後ろから眺めながら、俺たちもすぐに後を追つた。」

## 第二章 お礼と出発

デュラ爺が仲間になつてからの日々も、今までと変わらず毎日依頼をこなして過ごしていると、すぐに領主様と約束をした日になつた。

領主様の娘さん、つまり貴族家のご令嬢を救つた俺たちは大歓迎を受けながら、領主邸に入れてもらうことができた。

応接室に案内されると、すでに領主様が席に着いている。

「エリク、フィーネ、よく来たな。待つていたぞ」

領主様は前回よりも血色が良く満面の笑みで、とても幸せそうだった。

「お久しぶりです」

「座つてくれ。君たちは娘の命の恩人なんだから、遠慮はいらない」

「ありがとうございます。——ご息女はお元気になられましたか？」

全員がソファーに腰かけたところでフィーネがそう問いかけると、領主様の表情がさらに明るくなる。

「娘は日に日に元気を取り戻している。もう普通の食事も取れるようになったのだ。少しだけ庭で

散歩もしているし、表情も明るくなつた」

「そうですか……本当に良かつたです」

「ご回復、おめでとうございます」

ちゃんと治つて良かつた。

そこまで回復してゐのなら、あのレシピは睡冰病<sup>すいひょうびょう</sup>を治せる回復薬で間違いなかつたということだろう。

「ありがとう。本当ならば娘が直接感謝を伝えるべきなのだが、まだ万全の体調ではないため人と会うのは制限されているのだ。代わりに私から、改めて感謝を述べさせて欲しい。——本当にありがとうございました」

領主様は俺たちが恐縮してしまって頭を下げて謝意を伝えてくれた。

「約束していた礼の品もたくさん準備してある。ぜひ受け取つて欲しい」

「はい。ありがたくいただきます」

領主様の言葉にそう返答すると、部屋の中にいた使用人の男性が応接室のドアを開けた。すると外からいくつものワゴンが運び込まれてくる。

もしかして、これ全部がお礼の品だつたりする？

「先日聞いた君たちの要望以外にも、私からの気持ちとして準備させてもらつた。好きなだけ受け取つて欲しい。ただ從魔が増えていたのは、さすがに予想外であつたな……もし足りないようなら

ば、量を増やすが

「い、いえ！ 十分です！」

デュラ爺に視線を向けながら思案げな表情を浮かべた領主様を、俺は慌てて止めた。

この量で足りないなんて、信じられない感覚だ。

「そうか？」

「はい。こんなにもたくさんの品々を、本当にありがとうございます」

「領主様、ありがとうございます」

二人でしつかりとお礼を伝えると、領主様は満足そうな笑みを浮かべた。

「気にするな。君たちの働きへの対価なのだから」  
それから俺たちは領主様としばらく話をして、結局は準備してもらったお礼の品を全て受け取り、数台の馬車とともに領主邸を後にした。

馬車と御者さんはしばらく貸してもらえるようだが、大量の荷物をどうするのかは喫緊の課題だ。きつきん

「フイーネ、どうする？ 他の人たちにバレないよう、デュラ爺の異空間に収納したいよな」

「私もそう考えた。まず、宿に持つていても仕方ないよね？」

「ああ、結局置き場所なんてないからな」

馬車の横を歩きながら、二人で対処法を考えた。するとフイーネがいい案を思いつく。

「一度どこかの倉庫に入れてもらうのはどう？ そうすれば、次の目的地に運んでもらうための馬車を手配したように見せかけて、デュラ爺に収納してもらうこともできるんじゃないかな」

「フイーネ、それだ」

「なんとか無難な方法を思いつき、俺は安堵の息を吐き出した。

「今から借りられる倉庫を探すか」

「そうだね」

それからは慌ただしく街中を動き回り、俺たちはもらつたお礼の品を全て、借りた倉庫に入れることに成功した。ぐるりと全体を見渡すと、本当に凄い量だ。

しかしその中でも一際輝いて見えるのは——鍊金道具だ！

領主様は俺の要望通り、一番欲しかった有名工房製のセットを準備してくれた。領主邸の応接室で初めて見た時は、あまりの興奮に叫んでしまったほどだ。

「デュラ爺、まずはこれから収納を頼む」

少しの傷もつかないようだと、真っ先に収納を頼む。

『うむ、了解した』

目の前から消えてしまつた鍊金道具に思わずドキッとするが、そんな俺の気持ちを察してか、デュラ爺は頬もしく頷いてくれる。

『問題ないぞ』

「はあ、良かった」

「ふふつ、エリクは本当に鍊金が好きだね」

フィーネがそんなことを言いつつ、たくさんの食材が入った大きめの袋をデュラ爺に示した。

「デュラ爺、これは凍らせる空間にお願いね」

『分かった』

それからも皆で手分けしつつ荷物の収納を進めていき……もう暗くなるという頃に、全ての収納が終わつた。

『これで全部だな』

『あんなにあつたのが全部収納できちゃうなんて、本当に凄いね！』

一通り皆で感動したら、今後の話だ。

『この後はどうする？ これでこの街で滞在を続ける理由はなくなつたと思うけど、さつそく不毛な大地に向かう？』

『そうだな……』

実は領主様を訪ねる日を待つ間に、知り合いがいるところには挨拶を済ませてあつた。領主様にも街を離ることは伝えてあるし……出発してもなんの問題もない。それに早くスキル封じの石を鍊金するために、素材を集めたいのだ。まずは不毛な大地にあるという星屑石から。

自分の考えがまとまつたところで、俺は直近での移動を提案する。

『さつそく明日はどう？』

するとフィーネは少しだけ考え込み、すぐに頷く。

『いいかもね。王都までの遠距離馬車が空いてたら明日にしようか』

『まずは不毛な大地への馬車が出ている王都に行かないといけないんだもんな。じゃあ、今から明日の席の状況を聞きに行く？』

『そうしようつか。あ、皆はそれでいい？ 明日にはこの街を出ることになるけど』  
フィーネが三人にも問いかけると、まずはデュラ爺の頭の上で寛いでいたラトが大きく手を挙げた。

『もちろんいいよ！ 新しい街に行くのは楽しみだからねつ』

続けてリルンとデュラ爺も口を開く。

『我也構わない。パンがある街ならばどこでも良い』

『わしも久しぶりにいろんな街を巡つてみたいんじや。移動するのは構わんぞ』

皆が了承してくれたことで、俺たちは外門の近くにある遠距離馬車の乗り場に向かつた。

すると、ちょうど明日の早朝の便が空いていて、二人分の席を取ることができた。

ラトはフィーネの膝の上に乗れるから支払いは必要なく、デュラ爺は体の大きさ的に馬車に乗る

のは不可能なので並走、リルンはギリギリ乗れなくもない大きさらしいが、どう考えても邪魔なので並走となつた。

「二人とも、走るので大丈夫なのか？」

『もちろんじや。遠距離馬車を引くのはブラウンホースじやろう？ あの魔物にわしら神獸がついていけぬわけがない』

『その通りだ。むしろブラウンホースが遅くて合わせるのが大変なんだ』

確かにそうか、皆は神獸なんだもんな。

忘れかけていた事実を再認識し、俺は納得した。

『じゃあ皆、明日からの移動のためにおやつでも買い込もうか！』

宿がある方向の市場を指差しながらフィーネがそう宣言すると、全員の耳や尻尾がピンッと立つ。

『やつたー！ 早く行こ！』

『パンを買うぞ』

『わしは肉の挟まつたパンにしよう』

そうして俺たちは明日の出発という一大イベントを抱えて浮き足立ながら、市場に寄つて宿に戻つた。

ついに別の街へ移動する時だ。俺は緊張しながらも楽しみの方が上回り、ワクワクとする心を抱えながら幸せな気分で眠りに落ちた。

翌日のまだ日が昇り始めた薄暗い早朝。

俺たちは宿を出て、遠距離馬車乗り場に向かつた。

「早朝は少し寒いね」

「やつぱり日が昇らないと冷えるな」

大通りにもほとんど人がいない街中を歩くのは新鮮だ。生まれ育つたこの街を目に焼き付けるようにながら、早朝の街並みをゆっくりと見回す。

「寂しい？」

「うーん、ちょっとだけ。でも楽しみな気持ちの方が大きいな。いつでも戻つてこられるから」「確かにね。戻りたくなつたらいつでも言つて」

笑顔でそう言つてくれるフィーネの優しさが嬉しくて、俺は自然と笑顔になつた。

「おはようございます」

馬車乗り場に着くと、すでに御者を務める男性が待つていて、挨拶を交わす。

「従魔は乗るんだつたか？」

「乗るのはこの子だけで、こつちの二人は馬車と並走する予定です。ブラウンホースは怖がらないでしようか」

「ああ、問題ないだろう。……ただそうだな、一応敵じゃないことを示すためにも会わせとくか」

男性はそう言うと、馬車の前に移動した。

「従魔も連れてきてくれ」

その言葉に従つて皆で向かうと、リルンとデュラ爺はブラウンホースから少し離れた場所で止まり、その場に座り込む。それから両者はしばらくじっと見つめ合い……数十秒後にふつと視線を逸らした。

『大丈夫そうじやな』

『我らのことを敵視はしていないぞ』

『良かつたな』

問題なさそなことを確認したところで、男性は俺たちの名前を聞いてリストにチェックを付けていく。

『乗つていいぞ。途中で何度も休憩は挟むが、それ以外にも何かあつたら言つてくれ』

『分かりました。よろしくお願ひします』

馬車に乗り込むと、中にはまだ他の乗客はいなかつた。奥に詰めて並んで座り、フィーネは膝の上にラトの布団を取り出す。

『ありがと～』

ラトは眠そうな目を擦りながらその上に乗ると、すぐに小さく丸まつた。朝早くて睡眠が足りない

かつたみたいだ。

『寝るの？』

『うん。ふわあ～、ちょっとだけ』

『ははつ、可愛いな。……もう寝た？』

『寝ちゃつたかも。でも道中は長いし、寝てるぐらいの方が退屈しなくていいかな』

『確かに二日もかかるんだもんな』

王都までは途中の街に一泊して、全部で二日の旅になる。しかも早朝に出発して、到着は明日の日が沈む時間ギリギリの予定なのだ。

『途中の街も楽しみだな』

『そうだね。小さな田舎町みたいだけど、だからこそ美味しい食堂とかあるかも』

『美味しいところを引き当てよう』

フィーネとそんな話をしていると、馬車に他の乗客が乗つてきた。視線を向けると、お母さんらしき女性と小さな子供が二人みたいだ。

『あー！ なにその子つ！』

まだまだ無邪気な年頃の女の子が、ラトを指差して目を輝かせた。

『叫んじゃダメよ！ 迷惑でしょ』

お母さんが必死に止めようとするが、もう一人の男の子を押さえるのに精一杯で、女の子を止め

ることができないらしい。

「大丈夫ですよ。この子はラトっていうの。今は寝ちゃったから静かにしてあげてね」

フィーネがお母さんに笑みを向けてから女の子に話しかけると、女の子はラトが寝ているという言葉を聞いて両手で自分の口を押さえた。

「ちょっとお転婆だけど、素直でいい子だ。

「本当にすみません……」

「いえ、すぐ静かしてくれて、とてもいい子ですよ。あつ、向かいの席にどうぞ。私たちなら騒がしいのは気になりませんから」

「ありがとうございます。本当に助かります」

お母さんと男の子が向かいに腰かけ、女の子は馬車が動き出すまでずっと、寝ているラトを眺めていた。よほどラトのことが気に入つたらしい。

「私ね、ティマーになるのが夢なの。お姉ちゃんはティマーなの？」

「そうだよ」

フィーネのスキル、神獣召喚は珍しいため、表向きはティマーということにしている。

「どうやつたらティマーになれるのかな。スキルをもらつたんでしょう？」

「そうだね。でもスキルを選ぶことはできないから、そこは祈るしかないかな。ただ、ティマーじゃなくても魔物と触れ合える仕事はあるよ？ 例えば御者さんとか」

フィーネのその言葉に、女の子は目を輝かせて馬車の前方に視線を向けた。

「確かに！」

「ふふっ、そうでしょ？ あとはエリクが私と組んだみたいにティマーの冒險者と仲間になるのも一つの手かな」

それから女の子はフィーネにかなり懐き、道中は退屈かもしれないという予想を裏切り、とても楽しいものになった。

やつぱり子供つて賑やかでいいな。

「休憩で止まるぞ～」

本日最後の休憩として馬車が街道の端に止まるとき、乗客はすぐ外に降りていく。この時間になると、座つている体勢に疲れてくるのだ。

「ううん、尻が痛い」

俺たちも馬車から降りて、固まつた体を伸ばした。

「さすがにこの時間になると痛くなつてくるね。でもあと少しだよ」

「そうだな。あと一時間ぐらいだっけ？」

「確かにそのぐらいだったはず」

適当な雑談をしながらストレッチをしていると、リルンとデュラ爺が俺たちの近くにやつてきて

草原に寝そべる。

ここまでずっと走つてゐるからか、少し疲れたみたいだ。

「何かおやつを食べる?」

『うむ、パンが食べたいぞ』

『わしにも肉をくれるか?』

『二人とも食べるの? なら僕もコルンの実を食べる!』

皆のリクエストに従つて鞄に入れておいた食料を取り出すと、三人は嬉しそうに顔を綻ばせてそれぞれの好物にかぶりついた。

俺たちも果物を少し食べて水分補給をして、三人の隣で休憩だ。

のんびり穏やかな休憩時間を過ごしていると……急にリルンが顔を上げ、耳をピクピクッと動かした。

悪い予感を覚えながら、リルンの言葉を待つていると……

『魔物がいるな』

予想通りの事態だつた。

『む、本当じやな。しかもかなり近いぞ。風上で気付かんかったようじや』

リルンとデュラ爺は同時に立ち上がり、二人で森の中に向かう。

『倒してくる』

「ありがとう。気を付けてね」

魔物が近くにいることに僅かな不安を覚えたが、頼もしい二人の後ろ姿に安心した。

本当に皆がいてくれて良かつたな。

そんなことを考えながら、何気なく周囲を見回すと……俺たちから少し離れたところで遊んでいる二人の子供たちの後ろに、青色の大きな魔物が見えた。

のそりと静かに近づく魔物には、誰も気付いていない。リルンとデュラ爺も近くにいないから、

二人が倒しに行つた魔物とは別の個体みたいだ。

どうしよう、どうすればいい?

俺は恐怖と混乱に体が強張るのを感じながらも、必死に隣にいたフイーネの腕を掴んだ。

『フィ、フィーネ、魔物がいる』

その言葉に俺の視線の先を確認したフイーネは、大きく目を見開いてそつと立ち上がつた。俺も一緒に立ち上がり、戦闘態勢を取る。

「あの魔物、ウォーターベアだよね」

「ああ、素材を扱つたことがあるからほほ確実だと思う。水を使つた遠距離攻撃ができるし、防御力も攻撃力も高い。かなり強い魔物だ」

「なんとか……私たちで子供たちを助けよう。ラトは結界で防御、私とエリクが攻撃ね。リルンとデュラ爺が戻つてくるまで耐えねばいいから」

『分かつた。二人のことは僕が絶対に守るからね』

「ラト、ありがとな。三人で頑張ろう」

軽く動きを確認したところで、俺は腰に差していた剣を抜いた。

「行くぞっ」

まだ初心者の域だが、しつかり鍛錬は続けてるんだ。俺にもできるはず。

子供たちに襲いかかる機会を窺っていたウォーターベアも、俺たちの動きに気付いたのか、大きく体を起こす。

「グオオオオオ！」

その叫びで、子供たちも他の大人たちもウォーターベアの存在に気付いた。

「きやああああ！」

女の子が恐怖で叫ぶ中、ウォーターベアが鋭い爪を振り上げて子供たちを切り付けようとしたが、間一髪、俺の剣が爪を弾いた。

ガキンッッ！

鈍い音が辺りに響き、俺の腕を強い痛みと痺れが襲う。

剣を落としそうになつたが、それだけはなんとか耐えた。しかしすぐに体を動かすことはできず、ウォーターベアの標的が俺になつて……水弾が至近距離から放たれたが、ラトの結界によつて俺ま

で届くことはなかつた。

『エリク、大丈夫!?』

「ああ、ラト、ありがとう……」

バクバクとうるさい心臓の音を聞きながら、俺は恐怖に固まつてゐる子供たちの元に向かう。

「もう大丈夫だ。向こうに逃げよう」

「う、うん……」

「ひくつ、わ、分かつた……」

子供たちは泣きながらだが、自分の足で立ち上がつてくれた。

それに安堵しつつ、急いでその場を離れる。

するとすぐにお母さんが子供たちの元にやつてきて、二人を抱きしめた。

「おかげああん……」

「こ、怖かつたっ……」

安心したのかより激しく泣き出す二人を抱きしめながら、お母さんは何度も頭を下げた。

「子供たちを助けてください、本当にありがとうございます。なんとお礼を言つたらいいか……」

「いえ、大丈夫ですよ。魔物に襲われそうな子供がいたら、助けるのは当然ですから」

命をかけてつて話になると躊躇うかもしれないが、俺には心強い神獣の仲間がいるんだ。無事に助けられる可能性が高い中で、躊躇う理由はない。

「本当にありがとうございます！」

「じゃあ、俺は戻ります。ここも危ないかもしないので、もう少し離れていてください」

「そう伝えてから、俺はまだウォーターベアが暴れる場所に戻った。」

そこではフィーネがナイフを手にして身軽に舞っているが、致命傷となるような傷は与えられてないみたいだ。

「フィーネ、大丈夫か！」

「うん！ ラトのおかげで怪我は全くないよ。ただ、倒しきれなくて……」

「やっぱりウォーターベアって防御力も高いんだな」

リルンとデュラ爺が戻つてくる気配はまだない。

そろそろだと思うんだが……

「ラト、一瞬だけ俺とフィーネで耐えるから、一人を呼びに行つてくれないか？」

ラトなら瞬間移動ですぐに呼びに行けると思って頼むと、ラトは少しだけ心配そうに眉を下げながらも、頷いてくれた。

『分かった。でも僕がいない間、すつごくすつごく気を付けてね！』

「ああ、分かってる」

「私たちなら大丈夫だよ」

俺とフィーネの顔を交互に見たラトは、フィーネの肩からするすると鞄に入るような仕草をしてから、瞬間移動で姿を消した。

遠距離馬車の他の乗客に戦える人はいないようで、全員がかなり遠くに避難しているので戦闘の詳細は見られてないだろうが、一応の配慮だ。

「エリク、絶対に怪我一つなく耐えるよ」

「もちろんだ」

ラトが離れてる間に俺たちが怪我なんてしたら、ラトが凄く悲しむに決まっている。それは絶対にダメだ。

「はああ！」

俺はリルンからよく言われている、攻撃は強い防御になるという言葉を思い出し、思いつきり剣を振った。

その攻撃はウォーターベアの腕に止められてしまふが、その隙にフィーネがウォーターベアに切りかかる。

どちらかが注意を引いて、もう片方が不意打ちで攻撃を仕掛ける。

この連携がなんとか上手くいってウォーターベアを少しずつ追い詰めていたが……俺たちのやり方にストレスを溜めたらしいウォーターベアが、耳を劈く、<sup>（ひき）</sup>ような雄叫びを上げて前脚を大きく持ち上げた。

それとともに巨大な水球が生成される。これは絶対に逃げないといけない、本能でそう感じた。

しかしそうすぐに体は動かないもので、俺が逃げようとしている中ですぐに水球は撃たれ、襲つてくる衝撃に耐えようと体を硬くした、まさにその瞬間、ゴウツという轟音とともに鋭い風が吹いた。

水球は誰もいない森の中へ吹き飛び、さらにウォーターベアも近くの大木に思いつきり体を打ち付ける。

「リルン！ デュラ爺も来てくれたんだな……！」

戻つてきてくれた二人の姿に、俺は心から安堵した。

『危なかつたな。肝心な時にいなくてすまなかつた』

『ふんっ、エリクはやはりまだ初心者だな。ウォーターベアくらい倒せなくてどうする』

デュラ爺と違つてリルンからは文句が発されるが、そんなやり取りも安心要素の一つになつた。

『二人とも怪我はない!?』

心配からへにやりと眉を下げたラトに、俺は笑顔を向けた。

「どこも怪我はしていない。大丈夫だ」

俺たちの言葉にラトは満面の笑みになり、大きく頷く。

『うん！』

そんな話をしているうちに、リルンの風魔法によって吹き飛んだウォーターベアがむくりと起き

上がつた。

怒りを露わにして地面を蹴り、こちらに突進してくる。しかしその途中で、デュラ爺が動かした植物に足を絡め取られ、その場に倒れ込んだ。

倒れたウォーターベアへ、どこか優雅に近づいたリルンが——鋭い爪で一撃。

ウォーターベアはビクッと震え、すぐに息絶えた。

『やつぱり凄いな……』

俺の剣だと全く致命傷を与えられなかつたのに、リルンなら一撃だ。もはや凄すぎて羨ましいつて感情も湧かず、尊敬の念しかない。

『エリク、攻撃とはこうするのだぞ』

しかしこちらを振り返つてニヤニヤと煽つてくるリルンに、尊敬の気持ちは一瞬で消し飛んだ。

『リルン、そういうとこだぞ』

俺たちがそんな会話をしていると、遠くに避難していた他の乗客たちがこちらに近づいてくるのが見えた。

そこで大きく手を振り、もう安全だと伝える。

『魔物は討伐しました！』

『こつちに戻つて大丈夫ですよ～』

俺たちの声かけに全員が一斉に駆け戻り、興奮のまま感謝を伝えてくる。

「お前たち、強いんだな！」

「助けてくれてありがとう」

「あなたたちがいて良かったわ！」

「マジで助かつた……！」

「ウォーターベアなんて出たら、下手したら全滅だぞ！」

「全員から大袈裟おおげさなほどに感謝され、俺はなんだか照れてしまう。

そんな中でギリギリで助けられた子供たち一人が俺たちの元にやつてきて、可愛らしく口を開いた。

「あのね、助けてくれて、ありがとう……」

「あ、ありがとう」

子供たちからの感謝に胸が温かくなり、俺は目線を合わせるためにしゃがみ込む。

「ああ、怪我がなくて良かったな」

満面の笑みを浮かべた二人を見ていると、鍛錬をもつと頑張ろうという気持ちが湧いてきた。

それから皆で一通り無事を喜び合い、ウォーターベアを解体して持てるだけの素材を馬車に載せたところで、また先を急ぐことになった。

ともに危機を乗り越えたことで乗客皆の距離が縮まり、王都までの道中はとても楽しいものになつた。

### 第三章 王都到着と辺境へ

楽しい馬車の旅は思つていたよりもあつという間で、俺たちは王都に到着した。

初めての王都は——あまりにも大きくて人がたくさんいて、門前広場で思わずぽかんと周辺の景色を見つめてしまう。

「やっぱり王都は凄いね！」

「こんなに大きいなんて、予想外だ。大きいんだろうなって予想はしてたけど、ここまでなんて……」

『確かに広い街じやな』

『いろんなパンがありそうだ』

『木の実もたくさん売つてるかな！』

完全にいつも通りなリルンとラートの言葉を聞いていると、なんだか感動が少し薄れた。

「人とも、もう少しこう、情緒はないのか？」

『なんだそれは。そんなことよりも美味しいパンを探そう』

「お前なあ」